ダブルケアをする親を持つ子どもたち
受動的存在から能動的存在へと変わりゆく過程

○戸井田晴美（一橋大学・院／日本学術振興会）

研究目的

近年、晩婚化、晩産化、少子高齢化率の上昇とともに、新たな社会的リスクとしてダブルケアが注目されている。ダブルケアとは狭義の意味では、育児と介護の同時進行のことである。広義の意味では、家族や親族等、複数のケア関係、またはそれに関連した複合的課題と捉えることができる（相馬・山下 2017）。ダブルケアに関する研究は増加傾向にあるものの、その子どもに焦点を当てた研究は国内に存在せず、詳細が明らかになっていない。子どもたちは、ダブルケアという役割過重状態におかれた親たちの傍らで、家族の一員として何を思い、何を変化させようとするのだろうか。果たして、子どもたちは、目まぐるしく変化する家族の状況下において「ケアを受ける」という受動的な存在に留まるだけなのか。そこで、本研究では、ダブルケアをする親を持つ子どもたちが、いかにして受動的存在から能動的存在へと変化するのか、その過程を明らかにすることを目的とする。

研究方法

調査協力者への接触は、関係者からのご紹介やダブルケア関連のフィールドを中心に、スノーボールサンプリング法にて行った。調査期間は、2019 年 7 月からプレ調査を開始し、2019 年 10 月から 2020 年 9 月の期間に本調査を実施した。研究方法は、ダブルケアを行う人（以下、ダブルケアラー）22 名とその家族 3 名、ダブルケア予備軍 2 名、ダブルケアを支える人々12 名の延べ 39 名に、半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。本研究では、そのうちダブルケアラーの子どもに関する語りとダブルケアラーの家族の語りを抽出し検証した。

結果

子どもたちは、親から見ると保護させるべき存在ともいえるが、中には医療や福祉の専門用語を巧みにつかいこなし、ケアする側の役割を自然とやってのける子どももいた。ダブルケアラーからは「車いすを押す」、「ベットにコロコロをかける」、「とろみをつけたお茶をスプーンで食べさせる」など、親の助けになろうとする我が子の様子が語られた。子どもの側からも、親の経済的負担を考え「アルバイト代を家に入れる」、「奨学金を得られるようにする」、「親を支える」など、親に迷惑をかけないように自らを律するような語りも聞かれた。そこにはただ受動的にケアを受ける存在として、家族の中に留まるのではなく、「ケアをする」という能動的な存在として振る舞う姿があった。

考察

子どもたちの行動の背景には、ダブルケアラーだけでなくケアを受けるほかの家族の存在が影響していた。ダブルケアラーは、人の生まれる瞬間や人の亡くなる瞬間など、誰しも経験するとは限らない家族のライフイベントの傍らにいる存在ともいえる。たとえその体験がなくとも、高齢者の介護に関わる場面などにおいて、「死」について意識せざるを得ない状況に置かれることもある。それは、家族の一員である子どもたちにも、時を同じくして共有される感覚であり、深く心に刻まれることもある。そこには、まだ身体的な成熟を迎えずとも、精神面での成長が促進され、能動的な行動を表面化させていく過程があった。今後、ダブルケアは増加も見込まれ、生活者にとって複雑且つ、より困難な状況を生み出す可能性がある。家族の抱えるケアの現状の理解や課題の整理と同時に、その傍らにいるケアを受ける側にも着目することで、家族全体を包摂的に捉え直すことが可能となる。

引用文献

相馬直子・山下順子，2017「ダブルケア（ケアの複合化）」『医療と社会』27(1): 63-75.

（キーワード：ダブルケア、子ども、家族）